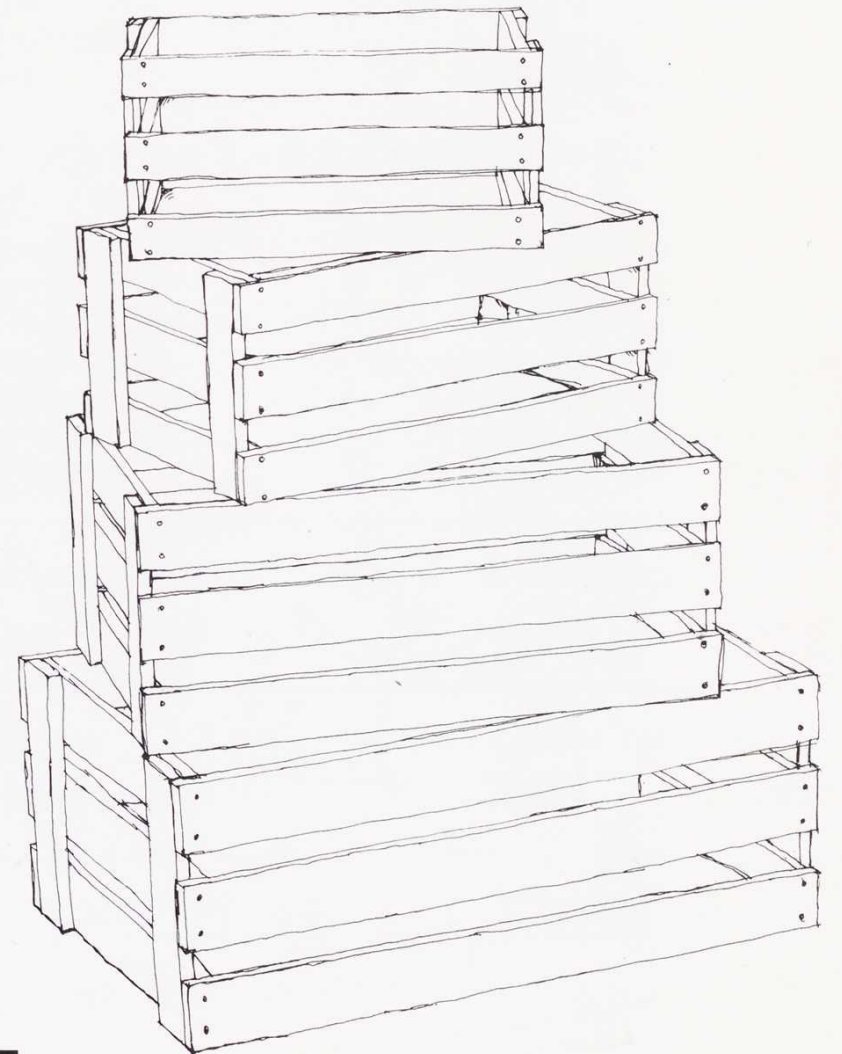


いろいろ見えてくる女のミニコミ

マイマイ族 第47号

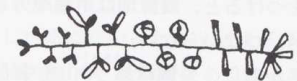
My My 族



vol.47

緊急特集 天災と出会う

～2004年新潟県中越大震災～



柏崎を抜けるときに思ったこと

本間 恵子(長岡市)

義父母がまだ生きていた頃、戦前の東京のことが茶飲み話に出ることがあった。義父が学校に通い出した頃の、銀座や本郷の、のどかでちょっとハイカラな出来事が多かったが、戦時中の痛ましい話もあった。

2人が新宿のホームで、線路をはさんで義父の姉と偶然出会ったことがある。久しぶりだったので、線路のあちらとこちらから、互いの近況を伝えあった。戦争が終わってから、連絡をとろうとしても不通になって、それきり会うことはなかった。空襲にでも遭って死んでしまったのだろう、と話す義父に義母がうなずいていた。もう取り返しのつかない過去の出来事への諦観から出た言葉であったと思うが、戦争という人災の犠牲になった身内への悔しさや怒りを洗い流したような語り口に、他の話のように相づちの打てない気持が残った。

中越地震の後、この日のことが思い出された。

あの地震が起きたとき、夫は車を運転して、信濃川にかかる長生橋の上だった。東京で学生生活を送る上の息子と娘は、一緒だった。娘がたまたま兄のアパートへ遊びに行っていたのだ。下の息子は、家の中に飼い犬を入れて遊んで

いて、私は実家のある上越市で、母を車に乗せていた。

前日、ひとり暮らしの母のいる実家に帰っていて、23日の朝は快晴であった。気分転換にちょっとそこまで、と母を誘って車で出かけ、そのまま妹の住む長野県に足を伸ばした。普段なら予約なしでは食事のできないレストランに運良く席が取れ、妹に電話して驚かせて、3人でお茶を飲んだ。出不精の母は、こんなに気楽に出かけられるなんて、と半ばあきれ、半ば喜び、連れ出した私は、孝行娘の気分であった。泊まっていたらと引きとめる妹の声を背に、また来るからと上越に戻った。

高速道路を降り、料金所で待っているときに、最初の揺れが来た。どうして前の車の人影があんなに揺れるのだろうかといぶかしく、その向こうに目をやると、出口のナトリウム燈の先が大きく揺れている。実家に着いてすぐ、2度目の揺れが来た。家がちっぽけな箱のように感じられて、胸がドキドキする。テレビをつけると、震源地は中越地方というテロップが流れていた。家に電話をするが、つながらない。

何年か前に、長岡は悠久山^{ゆうきゅうざん}を中心に活断層が走っていて、地震があると一帯の被害甚大という予想が出た。活断層は直近ではないが、学区は同じである。半信半疑であったし、今の家に引越した後のことなので、なるようにしかならないと楽観していたことが悔やまれる。まして、我が家は、裏に山を背負っていて、建てる時、山の斜面を少し削っている。6月の豪雨のときは、古くから住む近所の人が、この地区の土は大小の石が多いので地滑りはしない、現に本村に崩れる所はない、と言っていた。心配して、早く安否を確かめて、とせきたてる母に、この話をして大丈夫とは言うものの、震源地に近く、震度6という揺れではどうなのか、言葉とは裏腹の不安が募る。土曜の夕方、下の息子が家にはいるはずだ。

夫と子どもと話ができしたのは、夜半過ぎであった。とりあえず2人と犬は無事で、家も山も、目に見える被害はないとのこと。電気が点かず、水も出ない、家の中は物が散乱している、余震が強く地震がおさまったとは思えない、車の中にいたが今は家に戻った、と冷静な夫の声に、ひとまず安心した。

上の息子が、この頃のことを書きとめている。それによると、揺れに気がついてテレビをつけると、震度6、分布図に長岡の名もあって、すぐに携帯電話と家の固定電話にかけたが、通じなかった。上越にいた私からの電話で不安のひとつは解消したが、長岡とは不通ということで、最悪の事態も想像したらしい。息子と娘が地震の情報を集めたのは、ネットである。すぐに「地震情報」というサイトが立ち上がり、中越地方の人によって詳細が書き込まれ始めた。

長岡市内には、阪神大震災のような火事や建物の崩壊という大きな被害がな

く、少しほっとしたようだ。7時を過ぎた頃からメールが入り始め、夫や友人の安否を確認した。携帯電話を持っていなかった私には、長岡の様子は東京経由で伝わった。

明けて24日は、テレビを通じて被災地への自家用車の乗り入れを控えるようにという要請がなされた。それを見ながら、もつともだと思ふ反面、家のこと、職場のこと、生徒の安否が気にかかる。母1人を実家に残すのは心配だし、かといって余震の続く長岡と一緒に連れて行くにはためらいがある。迷った末、上越に母を残して、1人で帰ることにした。

高速道路も国道も、柏崎から先の長岡方面は不通だ。新潟に通じる道は、海沿いに1本しかない。午後3時半に実家を出て、柏崎の手前までは順調だったが、その先は渋滞が進まない。対岸は、柏崎刈羽原子力発電所だ。柏崎市内は24日には停電が復旧し始めたが、原発は地震直後も平常通り動き続け、高圧電線がチカッチカッと規則正しく光っているのが見えた。

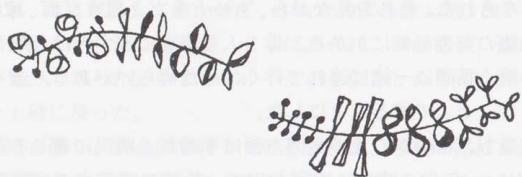
この時、今まで自分の家族や身近なことしか頭になかったことに気がついた。柏崎刈羽原発に反対する大きな理由は、地盤が弱く、活断層があることではなかったか。しかも直線距離にすれば、震源地からはそう遠くないはず。この原発のことは何も報道されておらず、地震にどういう対応をしたのかわからない。もし、炉心近くに異常があれば、大事故になるだろう。地震は天災だが、そのために起こる原発事故という人災は、地震の何倍も大きく、深刻に違いない。立地条件の悪さだけでなく、安全性が疑問視される原発への恐怖が、これまで以上に強く、具体的なものとして迫ってきた。絶対に起こしてはいけない人災である。義父母が空襲による死を受けとめたようには、事故を避けられないものとして受け入れては、いけないのだ。

海沿いから長岡に向かう道に入ったときは、日が落ちてあたりは真っ暗になっていた。カーブの多い初めての山道で、時たま対向車とすれ違う。掌がじっとり汗ばむのは、運転する緊張感だけでなく、原発への気持のためでもあったと思う。家に着いたのは、9時過ぎであった。長い1日だった。

後日刈羽村の知人から聞いたところによると、地震後1時間位して、柏崎市と西山町では「柏崎刈羽原発に異状はなく、全基正常に作動している」という屋外放送があったそうだ。刈羽村では発生から3時間後の午後9時近くに村長の放送があった。住民が一番知りたい原発の安否についての説明はなく、「村民は近所の人と協力し、慎重に行動するように」と繰り返すばかりだったという。後に、原発と刈羽村を結ぶ直通電話が、地震のため作動しなかったことが判明した。柏崎市はこの後、原発に慎重な新市長が、大きな災害が発生した場合は発電を中止するよう東京電力に要請した。

11月4日に、長岡で震度4というやや強い余震があり、7号基が自動停止した。このことを新聞で知って、古い1号基や2号基の安全に疑念を抱いた人は、少なからずいるに違いない。

(高校教員／1951年生まれ)



視界が開けた

服部 文枝(川口町)

10月23日(土)

5時56分だというのが、何の前ぶれもなく家がゆさゆさと揺れ始めた。中学生の時に新潟地震を川口町で体験したが、それとは比較にならない激しさと長さだった。

頭を抱えるようにして四つん這いになった。死を思った。迎えに来たかもしれない亡母に断りを言うつもりで、大声で叫んだ。

「母ちゃん、私まだ行かないよ」

最初の揺れがおさまると、外へ逃げ出した。家の前は軒かが共同で借りている大根畑になっており、そこへ近所の人たち数人と一緒に入ってしゃがんだ。その間も絶えず地が揺れて、立ってられないというのが本当だった。

4、50分して、勤め先から徒歩で夫が戻ってきた。

近所の大きな民家が、最初の揺れで1階がよじれ、2度目の揺れでパチパチと花火のはげらような音をたてながら倒壊した。崩れるとか壊れるという激烈なものではなくて、静かに、膝を折るように折りたたまったのである。その上を覆うように、屋根がかぶさった。その家は子どもや老人を含む7人家族だったが、最初の揺れで全員が脱出していた。

その夜は近所に住む町会議員の親族の中に加えてもらい、廃材で焚き火をして過ごした。揺れの間をぬって家に入りこみ、上着や長靴を手探りで引っ張り出し、冷蔵庫の中の食糧を持ち寄って、意外に賑やかな夜食になった。30人ほど集まった人たちは興奮ぎみで、むしろ陽気なほどだった。

夜半、町会議員氏の弟さんが経営する酒場の小上がりのテーブルを取り払っ

てもらい、そこで寝た。絶えず余震が来て、その度に声をあげて目をさまし、誰もほとんど眠らなかった。今度家を建てるときは、みの虫のように宙にぶら下がっているやつを作るのだ、などと言う人もいて、偶然にひとつ屋根の下で夜を過ごすことになった集団は、どっと湧いたりした。地震直後に電気は切れており、家主が終夜ろうそくや懐中電灯で要所要所を照らしてくれた。

10月24日(日)

夜が明け始めると、そこにいた全員が一斉に街に飛び出した。一夜のうちに、町の様相が変わっていた。なじみのスーパーや寿司屋、子どもの頃からあった洋服屋が、傾いたり崩れたりしていた。それらの建物を載せている道路が、真ん中から2つに割れ、沈んだり盛り上がりたりしている。マンホールは30センチも飛び出し、下を見ずに歩くことはできない。「地に足がついている」などという文章を私はいつも何気なく書いていたが、その地が揺らいだのである。

その日は、6キロ離れた職場に歩いて行った。学校や職場などに歩いて行く人が大勢いた。年齢も性別も目的も違う人たちだったが、見えない連帯感のようなものができていた。

職場の老人ホームでは壁や配管が壊れているため、入所者を他の施設に移送することになり、私が働く厨房も食器が割れたりオープンが倒れたりしており、当分閉鎖されることになった。結局、ガスも水も電気もない中で、携帯コンロとミネラルウォーターを使って簡単な汁物などを作り、1回分だけ食事を提供して、また歩いて帰ってきた。

その日は暖かい日で、大根畑で近所の人とむしろを敷いて過ごし、夜は前夜と同じ酒場で寝た。家から毛布や座布団を持ち出したので、寝心地は少し改善された。通帳や保険証なども、この時持ち出した。

この夜、電話が通じるという家があり、そこで借りて、初めて埼玉と東京にいる子どもたちと連絡が取れた。息子は電話が通じないので小千谷警察署に連絡し、死者の名を問い合わせたという。

10月25日(月)

山の上にある温泉施設が傾いているという情報が町から出され、私たちの泊まった居酒屋の近くの山も崩れる危険があるというので、国道17号線近くにある、空いたモーテルの車庫を借りて移ることになった。酒場の次はモーテルと、妙な渡り歩きだが、前述の町会議員氏がとっさに探してくれたものだ。コンクリートの上に段ボールを敷き、断熱マットを重ね、その上に布団を敷いて寝た。食事は、薪ストーブに廃材をくべて汁物や煮物を作った。この日から自衛隊の炊き出しが出るようになり、日に3度、避難所の人数分をもらいに行くことになった。

10月26日(火)

夫の実家がある川口町^{たむまやま}田麦山集落へ行ってみた。道路が激しく損傷し、やっとの思いでどどり着いた。集落中、ほとんどの家が倒壊していた。夫の兄一家や義母は田麦山小学校に避難しているということだったが、実家も学校も近くまで行きながら、道路の大きなひび割れにはばまれて入ることができなかった。

この地震は「新潟県中越地震」と名づけられ、川口町の被害状況が報道され始め、町のほとんどの人は

「おれの家が震源地だそうだ」

と言っていた。上越線や飯山線、上越新幹線も、川口町での損傷が特にひどいようで、線路が宙づりになっているところもあった。

10月27日(水)

地震後初めて入浴した。自衛隊が魚野川の河川敷に設置してくれたテントの中のお風呂だ。ダークグリーン^{うおの}の樹脂板を組み合わせた広い浴槽で、シャンプーやボディソープも揃えておいてくれる。

川口町では4人の死者が出たことがわかった。3人は高齢者で、1人は小学生だった。中に、同級生のお父さんがいた。

いろいろな物が配給される。衣類、レトルト食品、水、ティッシュペーパーなど。もらうことに慣れてくると、今ある物を減らさないとストックしておこうとするのか、もらった物を使わずにせせせと(入ってはいけなはずの)家に運んでしまい、またそれをひそかに失敬する人も出てきた。

「〇〇屋(店名ではなく、屋号)のおじさんが、救援物資を抱えてよその家から出てくるところを見た人があるんだって」

などという話が小声で伝えられたり、実際に救援物資を家から盗まれたとか、自転車を乗り逃げされたという人もいた。

1週間目に、電気と電話が通じた。私の家では地震発生と同時に電灯が根もとからちぎれてしまっており、笠や電球を新調しなければ灯りはつかない。しかし街灯がついて、避難所のトイレに通うのに懐中電灯をぶら下げて行く必要がなくなった。灯りというのは、実用以上に人の心に与える明るさがあるらしい。

11月に入って、墓が倒れていると知らせてくれた人がいた。夫とブルーシートとビニール縄を持って行ってみると、わが家のものばかりでなく、あらゆる墓があらゆる方向に転がり、のぞきこめば遺骨が見えた。突き上げるような揺れだったことがわかる。ブルーシートをかけ、縄で縛ってくるのが精一杯だったが、墓のことは意外に長く心や頭にひっかかることになった。わが家では、

仏壇も倒れて損傷している。

避難所での生活も、次第に嫌気がさしてきた。みんなでかたまっていたという思いと、1人になりたいという相反する思いがある。夜中に何度も起きて細長い仮設トイレに行くのも面倒くさい。私がどうにか自分を保っていたら、一緒に生活している年輩の人たちが、私が言うより先に

「ああ、嫌になったね。帰りたいね」

などと言ってくれたからだ。それに、不思議なほど、気持は天候に左右される。晴れた日は気分が軽くなり、雨の日は避難所での生活が永久に続くような気がする。

そんな気持でいたときに来てくれたのが、黒岩秩子さんだった。前もって電話を受けていたのだが、避難所を回るために軽自動車を購入したという彼女の行動力には感動させられた。公共の大きな避難所に行くと、物資が誰に渡ったかわからなくなると言っていて、この小さな避難所に悪路にめげずたびたび顔を出してくれ、山のような物資を手渡ししてくれた。さらに黒岩さんは私に告げた。「鈴木美和子さんが、あなたのためにカンパを始めたのよ」

視界が急に開けたような気がした。金額の問題ではない。『マイマイ族』のメンバーの顔や文章が浮かんだ。私はひとりではない、と実感した。あの人たちは、「貯金の残高がゼロ」と恥ずかしげもなく書きなぐった私のために、一番必要でしかも口に出にくいものを集めてくれようとしている。

あの人たちが見ているのでは、姿勢を正さなければならない。一生続くわけではないこの避難所での生活を、嫌になったなどと言わずに切り抜けなければならない。

視界が開けたという思いは、それから11月16日に避難勧告が解除となって、荒れ放題の家へ帰り着くまで続いた。いや、今も続いている。私に、こんなにまでしてもらった値打ちがあるのだろうか。どうやってお礼をしらいいのだろうか。

「あなたが元気を出すためにどんな使い方でどうぞ」

と鈴木さんは言ってくれた。皆さんの好意を思いつつ、その言葉に甘えさせていただきたいと思っている。カンパは2度にわたって私の口座に振り込まれ、なんと金額は40万円にもなり、拠出してくれた人は100人にのぼった。この紙上で、あらためてお礼を申し上げたい。

家は「半壊」と判定され、修理費の一部も町や県から出ることになり、その見通しも立った。夫婦とも職場への復帰もなかった。しかし、書いておかねばならないことがある。夫のきのこ会社にボランティアで来ていた41歳の男性が、長期の停電で発生したカビを吸いこみ、過敏性肺炎で亡くなった。県や国は彼

を褒賞したが、今回のボランティアで初めての、唯一の死者となった。痛ましいことだった。

一番大きな変化は、夫の母を預かるようになったことである。夫の実家は「全壊」で取り壊され、諸々の事情から家が建つまで母はわが家で暮らすことになった。85歳の母は7人の子を産み、2人をなくし、残る5人の子の成長だけを生きがいにしていた人で、日常は健康維持のために医者に通うことがほとんどだ。手をつないで歩くときには、まるで儀式のごとくしずしず行くことになる。

お互いに仮の家族のためか、あまり過大な期待をしなかったり、適度な距離があったりして、現在のところ平和な日常である。実の母には与えなかったかわりの言葉も私には出せる。そんな気持ちにさせたのは、つまり心に余裕を持たせたのは、あの『マイマイ族』のカンパ、行動そのものだと思う。

この地震では日本全国、また外国からさえも、自ら大きなリュックを背負って食事や旅費まで携え、被災地に手伝いに来るボランティアの人々に毎日出会った。

「僕は何もできないから、せめて町のお店で買い物して帰ろうと思ってるんですよ」

と言った青年もいた。ゴミ出しや障子貼りなど、頼んだことを懸命にこなし、「ありがとうございました」

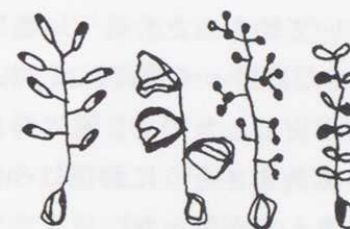
とお礼を言って引き上げる。阪神大震災の時はよそごとのように思っていたこれらの人々が、今回は身近に次々訪れてくれた。

この姿勢は、自らのネットワークに呼びかけて私へのカンパをいち早く実行してくれた鈴木さんや、軽乗用車を駆って元気に被災地を駆け回っていた黒岩さんたちにつながるものだった。他人のために身軽に動くこと、ためらいはしないこと、これらの人たちの意志が、自宅に戻るまで私たちをしっかり支えてくれた。私に変わることがあるとすれば、多分この点だろう。今回受けた恩を、どう行動で還元していくか、私自身を観察していきたい。

そして今回の地震で最も環境が変わりそうなのは、家を失って父祖の地を去り、新しい町へ引越すことになった義母である。方言で気軽に声をかけ合っていた彼女が、ドアにチェーンをかけておく都会型の生活とどう折り合いをつけていくか、また、仮設住宅で暮らし始めた夫の妹一家は、入居期限の2年間でどう暮らしを変えるか、私自身のことと共に見続けていくべきことは多い。

本当に地震が終わったと言える日は、私の中ではまだまだ先のようなのである。

(パート／1949年生まれ)



勤続20年目の「記念品」

酒井 由美子(長岡市)

10月23日(土)

その時私は、車の中にいた。信号機のない交差点で一時停止した途端、激しい揺れに見舞われた。首だけが異常に前後に揺さぶられ続ける。何が起こったのか、その瞬間は、まったくわからなかった。家までの約1キロを急ぎ、坂道

を途中まで上がったとき、ゴツンと何かにぶつかる音がした。思いっきりアクセルを踏み込んだ瞬間、車は宙に浮き、ドンと右側の前輪から落ちた。こんな所で止まってははいられないという一念で一気に坂道を駆け抜け、私は鉄砲玉のように家の中に飛び込んだ。家族全員怪我もなく無事で、この時、壊れた食器を除けばいつも通りの夕食前の我が家だった。電気もついていて、少し大きな地震があっただけのことなのだと、その時は心からそう思っていた。私たちを揺さぶり続けた有感地震は、日付が変わるまでで160回以上に上った。

10月24日(日)

昨日の出来事がまるで夢のように静かな朝だ。お天気も良い。夜中に頻繁に揺れを感じたが、その合間を縫うように浅く眠った。体は疲れているが、心の緊張はずっと続いている。私たちは一夜にして耐乏生活者になった。午後には、栃尾市の私の実家に自主避難することを決めた。バンパーが口を開けて無残な姿になった車に高校生の息子と娘を乗せて、地震の爪痕が生々しい道路を走った。私の家は長岡市東側の東山連峰を背にした辺りにある。この地域は、7月の集中豪雨でも大きな被害を受けた。

私は開業助産師をしている。産後を中心に産婦さんの家に訪問して沐浴や乳房マッサージなどのケアを行なう。仕事があれば年中無休、23日も1日仕事をして、午後5時40分に栃尾市を出た。あの時、勧められるままにゆっくりしていたら、トンネルの中か崩落した国道で激震に遭遇していたはずだ。赤ちゃんを抱えての被災は不安に違いない。こんな時だから仕事がしたいと思った。

10月25日(月)

栃尾市内の5軒を回る。23日の夜、停電と断水で自宅にいらなかった人は、「母乳が出ていて助かった」と言う。おむつだけ持って逃げれば、あとはミルクも哺乳瓶もいらなからだ。午前中に水道が復旧したので、タイルにひびの入ったお風呂場で沐浴をすることができた。気持ちよさそうにお湯につかる赤ちゃんの顔を見て、父親、母親、祖父母、私、みんなが笑った。

町内に避難勧告が出されて小学校に避難することになった、と夫から伝えられたのは、午後10時を過ぎた頃だった。

10月26日(火)

今日訪ねた親子は、産後4日目に病院で震災を受けた。2階にある産科病棟は激しく揺れて窓ガラスが割れ、病棟はパニックだったという。産科は母と子2人の命を預かる所だ。入院している母親たちよりも職員の方が慌てていたようだ。生まれたばかりの赤ちゃんを抱きしめて揺れの治まるのを待ったが、次々に余震が来るので生きた心地がしなかったと話す。そんな中でも赤ちゃんはす

やすや眠って、その寝顔が慌てていた自分を落ち着かせてくれたと言う。この2日間に訪問した人たちも、異口同音にそう言っていた。あの大きな揺れの中で、泣き叫んでいた赤ちゃんは誰もいなかった。赤ちゃんは無力のようであり、実は凄い力を持っている。しっかりと大人たちを支えていたのだ。

10月27日(水)

若い母親と50歳台の祖母は、笑顔で迎えてくれた。実家も嫁ぎ先も被災して、祖母の実家に避難したのだ。開口一番、祖母が言う。

「今日は(赤ちゃんの)お風呂いいです。途中でまた揺れると怖いから」その言葉にただならぬものを感じ、何日入ってないの?と聞き返した。

「あの日から、ずっと。でも毎日体は拭いているから」

入っていないから今日は入れてください、ではないのだ。これ以上は無理に勧めない方が良く感じた。乳房マッサージは、いつも通り行なった。かたわらに座った祖母が話し始める。

「あの日本当に怖い思いをしました」

「本当に怖かったよね。みんな怖い思いをしたね」

私がそう言った途端、祖母は声を荒げて

「そんなもんじゃないです！」

と興奮しながら言葉を続ける。

「父さんは仕事で、家にいたのはこの子と赤ちゃんと3人だけで。突然揺れて同時に家が傾いて、電気が消えて真っ暗になって。私が赤ちゃんを抱いてこの子と車庫に逃げて。車の中にいたら車に向かって地割れが走ってきて、ここにもいられないと急いで車を出して逃げたんです」

話しながら涙が滲んでいる。さっきの笑顔は一体何だったのだ。

「揺れるたびに胃がギュッと痛くなるんです。母乳の出も悪くなって」

と強ばった顔で母親が言う。その目にも涙が溜まっている。

私が「みんなが怖かった」という一からげの括り方をしたために、怒りがこみ上げて来たのだ。もしかすると私自身さえ気づいていなかった「大変なのはあなたたちだけではない、だから頑張る」という乱暴で無神経な励ましを感じたのかもしれない。怖さの経験はみなそれぞれに違う。他人が勝手にその被害や恐怖の程度を決めつけることはできないと、その時心に刻み込んだ。

赤ちゃんの体重は、1日50グラムの割合で増えている。順調だから大丈夫、心配いらないね、と言うと、2人ともほっとした穏やかな顔になった。今、借家を探しているという。

この日、妙見町みょうけんの土砂崩れから幼い命が救出された。どこの家でも救出の模様を伝えるテレビがついていた。「生きていてほしい、早く助け出してほしい」

と誰もが祈るように言っていた。分娩に立ち会う時、私は「無事に生まれて来てほしい」と祈っている。命の生死に向き合う時、人は自然と祈るのだろう。

あの日、私たちは「死」と隣り合わせだった。

10月28日(木)

今日最後の訪問地の村に入る県道は、7月の水害から通行止めが続き、最近やっと片側交互通行になったばかりだ。午前中まで断水していて、いよいよ水が出なければ井戸水を沸かそうと思っていたと、3人目の孫を持った祖母が笑う。少々の濁りはあるものの、臍の傷も治っていて支障はないと、たっぷりのお湯で沐浴をした。この子も、5日ぶりのお風呂に、うっとりとして虚脱した顔をする。お風呂に入れないと不満を言う訳でもない。赤ちゃんは本当に我慢強い。

母親と祖父は、23日の午後から出産祝いのお返しを届けに出かけ、配り終えた直後に地震に遭遇した。家には祖母と赤ちゃんだけが残っていた。大急ぎで戻って来たら、家は停電で真っ暗だったが、祖母は孫をしっかり抱いてトイレに避難して無事だった。この時に限って毛布でしっかりと包んでいたの、地震が来てはすぐに抱っこして逃げる事ができた。何故そうしていたのか不思議だと言う。初めての妊娠を流産し、その時に発見された難病の治療のために半ば妊娠、出産を諦めていた時に授かったのが、この子だ。

10月29日(金)

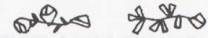
赤ちゃんの呼吸が安定せず、自分だけ昨日退院した25歳の母親は、初めての出産にもかかわらず、あふれんばかりに母乳が出ていた。病状を話す様子も落ち着いている。

夜、帰宅した夫が自宅の玄関戸に「災害宅地危険度判定」の紙が貼られていることを告げる。「要注意宅地」の黄色い紙は新潟県の災害対策本部から出されたものだ。来るべきものが来たという思いがした。

10月30日(土)

夫と2人で自宅に行った。「裏側の土砂がさらに崩落する恐れがあります」黄色の紙にはそう記されていた。1週間経っても水道は復旧しない。屋根の状態、上の段の地滑り、下への崩落。どれをとっても見通しは暗い。ここに住めなくなるかもしれないという不安が襲ってきた。「大切なものをみんな持ち出そう」そう決めた。大切なもの…一体何が大切なのか。お金であがなえるものとそうでないもの、確かに物にも思い出や愛着はある。この家ごと持ち出せたら、どんなにか良いだろう。それを一瞬にして失った人たちの悲しみは、計りしれない。自分で選んで持ち出せる私たちは、恵まれている。倒れそうな家具はみんな倒して、座布団や毛布、布団で保護した。

この日の仕事は1軒だけ、あとは休ませてもらった。



11月6日(土)

退院が延びていた赤ちゃんが、昨日帰ってきた。8日遅れの退院に、家族もほっとして喜んでいるはずだ。私も楽しみに訪問した。母親の隣に敷かれた小さな布団に眠る子がいる。沐浴をしようと抱きかかえ産着を脱がせ始めたとき、あることに気がついた。間違いであってほしい、そう思いながら作業を続ける。気持ちいい顔でお湯に浮かぶ子、いくつもの症状が見受けられる。間違いないと確信した。体重を量り、新しい産着を着せ、すべての処置を終えてから、検査の結果は出たのかを母親に訊ねた。一瞬顔が曇る。

「まだです」

と小さな声で答える。母子手帳には「染色体検査」の文字があった。言葉を選ばないと、傷つけることになる。やっぱりそうでしょうか、との祖母の問いに「これまで2人出会ったかな、でもこの子は表情がいいね、筋力もあるし」と私は答えた。

運命は非情だ。初めて出産した赤ちゃんがダウン症。10月21日に出産して、産後2日目に地震に遭遇し、わが子への不安を抱えながら、揺さぶられ続けてきたのだ。初めて訪問した日のあの気丈さは、このことを覚悟していたからだろうか。ダウン症という言葉避けて話をした。

午後になって夫から電話が来た。避難勧告が解除になったという。水道と下水道が復旧した。しかし地域全体が解除になった訳ではない。終結宣言が出るまではここにいた方が良く、と私の母は言う。結局、受験生の息子に押し切られて、自宅に戻ることにした。

11月8日(月)

ダウン症の赤ちゃんの沐浴をしている午前11時頃だった。高床式の2階にある浴室が激しく揺れ始めた。顔を拭いて頭を洗ったところでの余震だ。急いでお尻を洗って部屋に戻った。続けざまにまた揺れる。私たちの慌てぶりをよそに、その子はゆったりとしている。度胸がいいね、と思わず言葉がこぼれ出た。

「ほんとうに」

と母親の顔にも笑みがこぼれる。赤ちゃんは、ちゃんと生きる力を持って生まれてくる。この余震は震度5だった。

12月6日(月)

数日前、東京の友人から電話があった。可能ならという前置きで、「災害お見舞い、湯沢温泉1泊ご招待」という有難い誘いだ。家族を残して私だけ温泉など申し訳ないと思った。揺れない所でゆっくり眠りたい気持ちと、長岡から離れられない気持ちが交錯している。離れられないというよりも、ここから逃げ出せないという強迫観念だ。私は素直に友人の好意に甘えることにした。

多くを語らなくとも気持ちが通じる友人の存在と軟らかいお湯は、疲れ果てていた私に優しく沁みだ。何回も温泉に身を浸し、すとーんと落ちていくように眠った。久し振りに揺れない所で熟睡して体が随分軽くなったような気がした。

12月7日(火)

朝食を終えて部屋に戻ると、メールが届いていた。<湯沢です。9時14分の新幹線です> 今日のはあの親子の出発の日だ。実家での静養を切り上げて、関東の自宅に帰るのだ。心臓にも疾患があるので、1日も早く病院を受診したいと早朝に出発して、今湯沢に着いた知らせだ。ホテルから急いで車を出して、駅に向かった。改札口には、祖母と母子の姿があった。防寒服に包まれて母親の胸に抱かれてすやすや眠る子。この親子にはこれから数え切れないほどの困難が待ち受けているだろう。私は話を聞くことしかできないかもしれない。

「何かあったらいつでも電話してね、待っているから」と告げた。

1984年12月25日、開業助産師として仕事を始めた。あれから20年の歳月が過ぎた。これまでの私はただ漫然と与えられた仕事をしてきたように思う。「新潟県中越大地震」という災害がなければ、仕事について考え直すことはなかったかもしれない。被災者でありながら10月25日から突き動かされるように仕事をしてきたのは、誰のためでもない自分自身のためだった。仕事を通して元気や勇気や優しさを与えてもらったのは私の方だったのだ。

仕事を通して知り合えた多くの「人との繋がり」。これが勤続20年の私に与えられた「記念品」だ。世界中探してもどこにもない、大切なものだ。

(助産師/1956年生まれ)



振るわれた大鉦なた

鈴木 利子(長岡市)

倒壊はまぬがれたものの、地震は家中をひっくり返し、色々なものを引きず

り出してくれた。特に、夫が集めていた本は、倒れた本棚とともに足の踏み場もなく流れ出した。いやー、お父さん、大暴れだわ。

夫は、文庫を作ることが夢だった。『志度乃岐文庫』という名称を付け、名刺にも刷りこんでいた。定年になったら本格的に始動しようと思っていたのだろうが、定年2年前に逝った。

あれから5年。本は整理されず、ほこりまみれになっていた。夫は文章も書いていたので、その文章をまとめるか、集めていた本を整理して文庫を作るか、周りの人たちはそれとなく私を促していたが、一周忌、三回忌とも何もせず…というか、何もできなかった。そして中越地震。崩れた本の山の中で呆然としていた私に、夫の「そろそろ、何とかしてくれよ」の声が聞こえたような。

我が家の査定は「一部損壊」。しかし、家の周りにめぐらした石の塀はすべて倒れ、車庫の土台はずれ、その前のコンクリートは陥没。風呂場は、めっちゃめっちゃ。家の壁や土台にはヒビが入っている。修理の見積もり額にびっくりし、「震災借り入れ」を利用しようと思って、市役所に相談に行ったら、遺族年金であるため、借り入れはダメ。銀行に行ったら、低収入のためダメ。国民金融公庫に行ったら、まだ亡くなった舅名義のままなので、「死者にお金を貸すことはできない」

と言われ、ダメ。困って夫の姉に相談したら、この際、私の息子たちへの相続を考えようか、という話の流れになった。

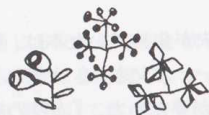
地震に大鉦を振るわれ、それを境に私の人生は、否応なしに動き出している。2月には63歳、そろそろ残りの人生を数える年である。

先のことはわからない。中途半端で終わるかもしれない。頓挫するかもしれない。それはそれで仕方ない。そんな気持ちでいる。

今年は、夫の七回忌でもある。

(染織工房主宰/1942年生まれ)

コントロール不能



鈴木 千栄子(長岡市)

新しい年が明けた。年末からの雪が、みにくい傷跡をカバーして東の間の安らぎをもたらし、結婚生活33年で初めて、夫婦2人だけの正月を迎えた。

夫の両親とべったり同居で始まった生活は、2人の子どもが誕生して6人になり、7年前に姑を、2年前には舅を見送った。2人の子どもが相次いで妻を迎え、昨年は、ともに生後4か月の孫を加えて8人の大所帯で正月を過ごした。今年、地震によって受けたダメージを応急修理しただけの我が家で全員揃うというには、いささか抵抗があった。

我が家は、長岡の南東部の山沿いで悠久山の近く、山古志村とは東山連峰^{やまごし}の間に背中合わせの位置にある。長岡でも激震地帯だったここ栖吉町^{すよし}では、我が町内を含め幾つもの町内が避難勧告地区となり、小・中学校が避難所となった。私たちは、高台にあって平屋のおかげで難を逃れた町内の公民館に自主的に集まり、そこを住民50名の本拠とした。

車で10分ほどの場所にある長男の家は、幸いほとんど無傷だった。夫の指示で、別棟に住む次男一家とともに、その日の夜更けに車で移動した。異常な隆起と亀裂でずたずたになった道を必死に抜けてしばらく進むと、街には明かりが灯り、普段と変わらぬ様子である。数時間前に味わった死ぬほどの怖い思いは何だったのかと、不思議な気持がした。春から町内会長になっていた夫は、役目柄、町内に残らざるを得ない。私もしばらくの間、長男宅と避難所を往復することにした。

町内の全戸が被災し、地滑りで道路がずれた箇所もある。我が家は危険度判定で赤い紙の「危険」、次男の家は黄色の「要注意」、被害認定はどちらも「大規模半壊」であった。書類に不慣れな町内の人と同行した夫が目にしたのは、市役所のホールを埋めつくす市民の行列だった。書類をもらうにも、提出するにも、3時間待ちは当たり前な状態が続いたらしい。必死なのは、市民だけではない。市役所職員の甥は、休日返上で、残業に次ぐ残業と戦っていた。

避難勧告解除後は徐々に家々に明かりがつくようになったが、仮設住宅や仮住まいへの入居のほか転居した家もあり、今は半分以下の14軒でしかない。私たち夫婦は、2か月ぶりに家に戻った。近所の人たちは、我が家の2階についた電気を「灯台の明かりのようだ」と喜んでくれた。

本音を言えば、ここで暮らしていくことには不安がある。だからと言って安

心・安全を得るには経済力が必要であり、私たちが背負える荷物の量には限りがある。自分の気持ちに折り合いをつけるには少々手間がかかったが、築8年の家を修理して住むことに、夫とともに心を決めた。傾いたままの柱も、ひびだらけの壁でも、たった一言「大丈夫」と言ってくれたら気が休まるのに…誰も安全を保証してくれないから、自らを鼓舞して慰め、自らが納得するしかない。

次男の家は、春になったら取り壊して建て直すことになった。若い夫婦があらためて、どこでどのように暮らしていくかの結論を短時間で出さなければならなかったのだから、相当に苦悩したと思う。彼は今も、職場と11月1日以来世話になっている見附^{みつけ}市の妻の実家を往復し、そこから自分だけ自宅へ戻って眠る生活を続けている。

「頑張った自分へのご褒美」という都合のいい理由をつけて、女友だちと小旅行に出かけた。その数日後の1月19日夜に、震度4の余震が来た。いつもより長く感じる揺れに、大あわてであちこちをヒモで縛り、ガムテープを貼り、外へ逃げようかとまで思った。気がつくやうに、私の身体から冷たい汗が吹き出していた。これまでも余震の度に怖いと思い、ビクビクしていたけれど、このような汗は初めてだった。

一体、どうしたんだ？ 強いはずの私が、がらがらと音を立てて崩れていく。足元のふらついた弱腰の自分の姿にうろたえた。こういうのが後遺症と言うのだろうか？ それとも、これまでの私はただの「から元気」だったのか？

少雪の予報が大きく外れて、七草の頃から雪が降り続き、とうとう大雪警報が出された。昔から「災害のあった年は大雪になる」と言われているようだ。それだけにご免だと思っていたけれど、泣きっ面に蜂、その通りとなった。19年ぶりの大雪は大きな痛手を与え、既に倒壊家屋が50棟にもなるという。

昼夜となく何日も降り続く雪で、1階の窓は全部ふさがった。除雪車は、重くて固い雪を大きな塊のまま家の前に置き去りにする。落雪式屋根から滑り落ちた雪にすっぽりと埋まった家は、まるで「かまくら」状態になる。緊急時に備えて出入り口の確保は必須であり、1日に何回も雪掘り作業をしなければならぬ。灰色の空からすき間なく降る雪で昼なお暗く、3メートルを超す雪の壁は交通大渋滞を起こし、家々を孤立させる。

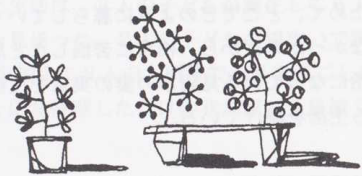
今も時々襲う余震に、不安は倍増する。雪国の冬はひたすら春を待つ日々であるが、こんなにも春が恋しい冬は、これまでなかった。

我慢強くも賢くもない私は、言葉にならない叫びが胸に溜まっている。どこへ向けて叫べばいいのだろうか。「ぎゃーっ！」と雪の山にぶついたら、一気に溶けて春が来てくれるだろうか。

私は、「あの日」と同じ23のつく日が近づくと、胸がどきどきする。あの夜のような大きくて青い月が出ると、背中がざわざわしてくる。

雪が降れば憂鬱になり、お日様が出れば元気になる。私の心はお天気次第。しばらくは制御のきかない自分につき合っていくしかない。

(主婦/1947年生まれ)



私の被災地支援

黒岩 秩子(南魚沼市=旧大和町)

大地震の当日、我が家は留守宅で、翌日戻った私たち夫婦は、ほとんど被害のないことを確かめた。大きな余震の27日から月末まで不在だった私を玄関で待っていてくれたのは、被災地への支援物資と義援金の現金書留だった。

11月1日から活動開始。ボランティアセンター経由で避難所へ行く、という正規のルートで尋ねると、その時にはすでに物はまったく足りない状態になっていた。そこで、個別に連絡をして、要求された物だけを持って訪ねることにした。ちょうど国道17号線の和南津トンネルが前日の夕方に開通し、川口・小千谷方面へ最短距離で行けるようになっていた。

岩手県宮古市の知的障害者の皆さんが作った雑穀雑炊や、レトルトカレーがたくさん送られてきているのに、避難所では不要と言われる。ところが、電話連絡がついた服部文枝さんに聞くと、

「嬉しい、食料には不自由している」

と言うではないか。こちらこそ嬉しくなって、注文された長靴、靴下、下着、ゴム手袋などを送られてきた義援金で買って車に詰め込んで出かけ、服部夫妻に渡すことができた。夫(編集部注：医師・黒岩卓夫氏)が在宅医療ネットワークの皆さんに呼びかけて送っていただいた物資の中から、毛布、ホッカイロ、バスタオル、シップ菓を持って行き、これらも喜んでいただいた。

この避難所は、町議会議員の呼びかけで、自主的に作ったところだ。後日、長靴をと言われて持って行ったときに、5歳ぐらいの子どもを抱いた若いお母

さんが寄って来て、

「子どものはありますか？ この間頼んでおいたのだけど、まだ来ないんです」と言うので、サイズを聞いて、翌日送ることにした。実際、川口には、お店がつぶれていて、売ってないのだ。若いお母さんのこのような積極性がとっても嬉しかった。行政に支配されていない避難所のよさを感じ取った。

一方、山古志村のある部落の避難所に連絡して注文を聞いたときのことである。コーヒーとクレープを欲しがっています、と言うので私の町のスーパーでインスタントコーヒーとクレープを買い込み、近くのケーキ屋さんで「あるがじゅうの(=魚沼弁で、ありったけの)」クレープを買い占めて出発した。

長岡にあるこの避難所は、300人の大所帯。小さな町のケーキ屋さんでは20個ほどしか揃わなかったもので、とりあえずそれを届け、新潟市の友人に頼んで翌日、ケーキを300個買って持ってきてもらうことにした。避難所で友人と落ち合って300個のケーキを届けたとき、前日応対してくれたこの避難所の責任者である役場職員の女性に、前日のクレープは？と聞いたら、

「夜になっても起きている方があるので、スタッフだけで食べることはできませんでした」

と言うではないか。20個のクレープをスタッフにもらったと思ったこと、そもそもスタッフという概念があることにも驚いた。この女性は、友人と「全然行政のにおいを感じさせない人」と話し合っていたほどの人だった。その人がこんな対応！ 私だったら、クレープを4つ位に切って置いておき、食べたい人が食べるようにしたに違いないと思うのだが。

同じようなことは、川口町田麦山小学校の避難所でも体験した。震災後ちょうど1か月目、関西の被災地へ7年間通い続けたという京都の医者と一緒にだった。実家が田麦山だという服部さんの夫君に案内していただき、ボランティア受付で、京都から医者が来たことを伝えると、対応の人の顔がほころび、

「いなくて困っていた」

と言う。出てきた看護部という人は

「私も静岡からきたボランティアなので、わからないのですが、やけどの人のためのガーゼが足りなくて困っています」

と言うので、早速『もえぎ園診療所』(編集部注：黒岩卓夫氏経営)に連絡して、届けてもらうことにした。

「中に入って被災者の皆さんのお話を伺ってもいいでしょうか？」

「それは困ります。係のところまでのご案内しますが」

ということで中に入って行ったら、そこには、看護部の責任者がいた。ところがその人も、遠くからきたボランティアで、ガーゼを届けると言う、

「いつ帰るかわからないので、責任持てません。そんなことされても困ります」と言う！ 医者に対しては、
「どんなことができるか、この紙に書いてください。それを出していただいてから、協議をして、声をかけますから」
と言ったという。地元の人が窓口にならずに、よその人たちに任せてしまっているらしいのだ。日ごろ、ボランティアとの付き合いをしてこなかった行政の現状が、ここでは、責任を取れないというボランティアに任せっぱなしにしてしまったということなのだろう。

川口町の役場には、「マスコミ出入り禁止」という札がかかっていたという。そのために、川口町の人たちは、自分たちの情報を外に出せなかったし、外からの情報もロコミに頼るしかなかった。新年の挨拶で、川口町長が「ボランティアに振り回された」と発言したことが、新聞で批判を浴びていた。

関西の地震の時には、ボランティアが、行政と独立した形で『元気村』を作って7年間活動してきた。その流れで今回も、避難所生活に耐えられなくなった人たちにテントを送ろうと呼びかけ、全国から集まった600張りのテントを小千谷高校の庭に張った。このことを知って『中越元気村』を訪ねたのは、11月終わりのころだった。必要と言われた物を買って揃えて、持って行って以来、何回か行き来をしている。

12月にほとんどの仮設住宅が出来上がると、行政が運営するボランティアセンターはすべて解散したという。1月半ばに行ってみると、『元気村』への要請は、ほとんどが雪掘り(この辺りでは「雪下ろし」とは言わない)だという。11月始めから常駐し続けの人は5人にまで減り、一時的な人を含めて10人位では要請に応えきれないとこぼしていた。その日も大変な大雪で、上越線は不通になっていたのだが、5日間降り通したために、何軒もの家が倒壊した。『元気村』の人たちが関わる雪掘りボランティアがどれだけ重要であるか、計り知れない。手足がすでに雪掘りには耐えられなくなってしまった私にできることは、自分のホームページで、それを呼びかけること位でしかなかった。

以前私が主宰していた登校拒否児や障害児者の『大地塾』に関わりがあった人たちに電話をして、地震の被害がひどかったという家を訪ねた。そのうちの1軒では、27歳の青年がずっと閉じこもっていたのに、2年半ぶりで家の外に出だし、家族と食事をともにしたという。地震が思わぬ効果を発揮した例だ。

私のところには、まだ寄せていただいた義援金が残っている。これからも、必要とされることを聞きながら、お金で解決できることがあれば、お役に立ちたいと思っている。

(元参議院議員／1940年生まれ)

マイマイ族第47号

定価300円 2005年5月7日発行